



第582回 「崇洋媚外」

新型コロナウイルス感染問題が発生してから、中国で2人の医師がものすごく有名になった。1人は鍾南山医師だ。専門は疫学、呼吸器学、臨床医学なので、2003年SARS（新型肺炎）の感染拡大時には、広州市呼吸器疾病研究所の所長として大活躍した医療専門家だ。いまは、中国の国家衛生健康委員会専門家グループ長も務めている。武漢市政府が最初ひたすら隠そうとしていた新型コロナウイルス感染問題は、鍾医師が「人から人に感染するものだ」と指摘してから、社会的に注目され、真剣に対策が考えられるようになったのだ。

もう1人は張文宏医師だ。復旦大学附属華山病院感染症科で主任を務める張医師は上海の新型コロナウイルス医療専門家チームの責任者でもある。しかし、彼は海外では無名に近い存在だ。新型コロナウイルスに感染した患者の治療が一番しんどかったとき、彼は「共産党員は第一線に行くべきだ。第一線に配置すべきだ」と発言をしたことで、中国国民からたいへん評価され、それ以降は一躍超有名人となった。

4月15日、張医師はある新型コロナウイルス感染対策セミナーに出たとき、免疫力を強化する意味で、朝食の栄養分を重視すべきだと主張し、「子供の朝食には牛乳と卵を出してください。おかゆはごめんだ」とアドバイスした。

その発言はネットで30万人以上の大議論となり、中華食の伝統メニューというイメージの強いおかゆよりも、西洋食を連想しがちな牛乳と卵を勧めた張医師は「崇洋媚外」と一部の人間から罵倒された。崇洋媚外とは、外国の物事をやたらに崇拜し外国にこびを売ると言うことを言う。文革時代に知識人を批判する際、この崇洋媚外という言葉がよく使われた。

私もおかゆが大好きだが、張医師のこのアドバイスに何の抵抗感も覚えていない。逆に、このような発言に対して、崇洋媚外という言葉を使って張医師を罵倒する人間の神経が理解できないどころか、嚴重な警戒心を持つ。

1983年秋、中国では、わけの分からない「精神汚染一掃運動」が突如、巻き起こった。私が教壇に立った大学でも、テキストに使われている外国の文学作品を総点検して、問題のあるものは直ちに削除し、それ以上使用しないようにとの指示が下った。政治学習の雰囲気もたちまち險悪なものとなった。

CCTV（中国中央テレビ）のアナウンサーがこうしたニュースを伝えるとき、これまで着用していた背広をやめて、人民服姿になった。それを見た多くの知識人は敏感に政治の風向きが変わったと警戒した。その1カ月後、いまや故人となった胡耀邦総書記（肩書は当時）が日本を訪問し、在日中国大使館で留学生と会見した。そのとき、胡総書記は背広のままで会見場に姿を現し、手を大きく動かしながら、「なぜ背広を着ること、フォークやナイフを使うことがブルジョア的なのか」と詰問し、服装や生活スタイルで人を批判することに反対意見を表明した。「精神汚染一掃運動」の拡大にはっきりと反対した胡耀邦の発言は海外のメディアを通して世界中に広く報じられた。こうして「革命左派」たちが推し進めようとした第2の文化大革命である「精神汚染一掃運動」は2カ月もしないうちに幕を閉じた。

数年後、留学のため、日本に来た私は何度も先輩の留学生からこの話を聞いた。大胆に発言し改革開放路線を守る胡耀邦をいまでも尊敬している。

牛乳と卵の朝食の勧めから崇洋媚外を読み取る人間が存在している以上、文化大革命再来の心配は消えない。崇洋媚外というレッテルを貼りまくる空気と傾向を警戒しなければならない。

----- キ リ ト リ 線 -----

崇洋媚外 (chóng yáng mèi wài) チョンヤンメイワイ